

間違いのないアート作品を買うために
絶対に知っておくべきこと

@ GALLERY
TAGBOAT

奈良美智の作品をコレクションした元銀行員の話

2013年4月5日、奈良美智の個人所蔵コレクションが、オークションハウス大手サザビーズの香港でのセールに出品され、合計で1,800万香港ドルを超える落札額が見込まれていたのだが、その予想を2倍以上大幅に上回る4100万香港ドル（約5億1496万円）で落札された。

出品された奈良美智のコレクションは、東京の元銀行員・K氏が所蔵していた計35点。現在は海外に居住にしているK氏は、以前から奈良美智氏の画風に魅了され、1988年から2006年まで20年近くかけて、アクリル画やドローイング、版画などの作品をまだ安いうちからこつこつ買い集めてきたという。

特に初期のドローイングは数万円、ペインティングでも数十万円で購入できたと予想され、それが今では当時の価格の50~80倍くらいになっているものもあるようだ。

K氏は奈良美智が世界的な名声を得るよりずっと以前からサポーターとして支援しており、作品収集を通じて、作家の足跡を辿る旅をしたり、作家自身と交流を持ったりすることで、アートコレクションを自身の人生の中でも重要な一部であると考えようになったと語ってる。

K氏の今回のオークションの結果は、自分自身が良いと感じるアートを集めようと考えているコレクターの方々にとって、非常に刺激的な出来事であると言える。

アートを集めると言う事は、決して手が出せないような贅沢という訳ではなく、買える範囲のお金で人生を楽しむことができる身近な趣味なのである。



5年で10倍になった草間彌生の作品の話

草間彌生もこの5年間で最も作品価格が高騰した日本人作家の一人である。

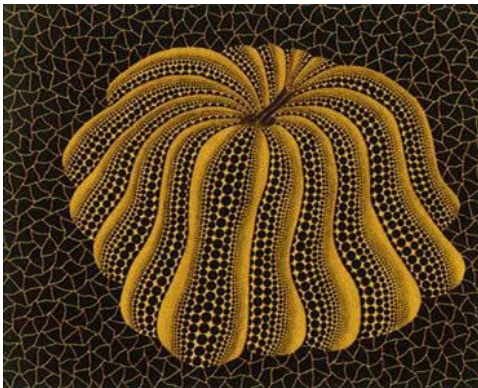
オリジナルペインティングの人気は言うまでもなく、版画作品も極めて好調な価格上昇を推移している。

以下の「かぼちゃのひるね」というシルクスクリーンの作品を参考までに見てみると、過去5年間のオークションのエスティメート（見積り）価格は約20万円から約200万円と10倍近く跳ね上がっている。

黄色のかぼちゃのシリーズはアジアで最も人気のモチーフではあるが、インフィニティネットなどの他のモチーフにしてもこの5年で5倍以上は高くなっている。

これは株式をはじめ一般的な金融商品よりも圧倒的に利回りがよく、草間彌生の作品を安いうちに購入できた方にとっては短期である程度の財産を作れたはずだ。

かぼちゃのひるね シルクスクリーン 62×75.8cm ED120, 1993年



【草間彌生「かぼちゃのひるね」の過去5年間のオークション価格の推移】

日付	オークションハウス	エスティメート（見積価格）	落札価格
2011年3月25日	マレットジャパン	200,000 - 300,000 円	243,075 円
2011年9月10日	毎日アートオークション	300,000 - 400,000 円	300,000 円
2012年6月30日	毎日アートオークション	150,000-250,000 円	480,000 円
2012年12月1日	毎日アートオークション	300,000- 500,000 円	630,000 円
2013年6月8日	毎日アートオークション	400,000- 600,000 円	1,400,000 円
2014年5月26日	ソウルオークション（香港）	1,000,000 - 1,428,000 円	1,268,000 円
2016年1月23日	SBI アートオークション	1,500,000 - 2,500,000 円	1,955,000 円

よいアート作品に出会うために

アートに正しいも間違いもないし、どんなアートをどこで買うかもその人の自由である。街角や旅先で突如出くわした作品に運命的な出会いを感じ、その場で即決購入したことがある人もいるだろう。

もちろん、この作品が欲しいという突発的な強い衝動こそ、アートを買う一番の理由だ。しかし、よい作品、そしてよいコレクションを持つためには、一度立ち止まって冷静に考えることも必要である。

その作品は本当に自分が好きな作品か。価格に見合った価値があるのだろうか。

売り主はアートに対しどれほどプロフェッショナルと言えるのだろうか。

アートは決して安い買い物ではない。だからこそ、せっかくなら賢い買い物をしたいものだ。そのためには、もう少しだけアートを学ばなければならない。

そう言うともんどくさい作業に感じられるかもしれないが、ある程度の知識としかるべきプロセスを踏めば、自分が望む作品を見つけ出し、あなたらしいコレクションを構築していくことは誰にでもできる。アートのコレクションというとはほどのお金持ちでないと持つことができないと思うかもしれないが、限られた予算の中で、じっくり良い作品を集めて行けば、素晴らしいコレクションを構築することは決して夢ではない。

ここで紹介する手順はより良い作品購入、より良いコレクション構築の手助けにはなるはずだ。参考にしながら、アートとともにある豊かな生活を楽しんでほしい。

あなたの好きなアート作品は？

人にはそれぞれ好みがる。アートに関しても自分はこういう作品が好きだ、こういう作品がほしいとすでに心に決めている人もいるだろう。

しかし、あなたが思う好みのアートとは、あなたが今まで実際に見てきたもの、得てきた知識の範囲で形づくられたものに過ぎない。そこには、作者が有名であるとか、高額な値がつけられているとか、評論家が高く評価しているとか、他人の意見が強く影響している可能性もある。

果たしてそれが、本当にあなた自身の好みといえるだろうか。

実際にアートを買おうとすると、世の中にはあなたが想像している以上にたくさんの種類のアートが存在していることに気づく。

もしかしたら、あなたが好むアートは、もっと他にあるのかもしれない。今まで抱いていた好みはいったん頭の中の引き出しにしまって、真っ新たな気持ちで自分の好みのアートを一から探す旅に出かけよう。

ひたすらアートを見てみる

アートを学ぶうえで、最も重要なこと。それは、とにかく相当量の数の作品を見てみることである。美術館やギャラリー、アートフェア、アート関連の本やウェブサイトなど見られるあらゆる場所で、できる限り多くの作品を見てほしい。西洋美術、日本美術、現代美術、絵画、彫刻、大きい作品、小さい作品、分野は限定せず、様々な種類のアートを見ることだ。

さらには、レストランやショッピングモール、ホテルやオフィス、日々の生活の中に存在するアートにも意識を向けよう。壁やディスプレイスペースにどんなものが飾られているか。もちろん、それらはただの装飾品であって美術品ではないかもしれない。しかし、あなたの眼を養うには格好の教材となりうる。

この段階で注意しなければならないことは、決してその作品を理解しようとしたり、作者を明らかにしようとしたり、他人に意見を求めたりしないこと。まずは、作品に向き合い、好きか嫌いか、幸せな気持ちか憂鬱な気分か、ある出来事を想起させるか、はたまた空想の世界へ誘われるか。その作品に対するあなたの心の動きにだけじっくり耳を傾けてほしい。たとえ嫌いな作品に出会ったとしても眼を背けず向き合うこと。なぜなら、嫌いな作品を知ることは好きな作品を知る大事な手がかりでもあるからだ。また、以前に見たことがある作品であっても常に初めて接するかのように見てほしい。あなたの感じ方は以前とは変わっているかもしれない。

具体的に好きなアートを絞っていく

アートを見るとは作品をただ眺めることではない。鑑賞するためには、それぞれの作品とじっくり向き合う必要がある。

では、一体、作品のどんな部分に着目すればよいのか。

まず、作品を至近距離で見た後、ゆっくり後退しながら全体を眺めてみよう。

作品の印象はどう変化するか。どんな色が使われているか。表現されている対象は何であるか。

素材は何を使用しているか。

サイズ、額縁といった物質的側面にも着目してみよう。さらに、筆の動きや一本の線といった作品の細部にまで目をやろう。それぞれの要素が作品にどんな効果をもたらしているのか。じっくり観察しながら見ることだ。

こうして色々な作品を見ていく中で、もしあなたが本当に好きだと思える作品に出あったら、どこで見た作品なのか、どんな作品なのか、何が気に入ったのかだけを書き留めておこう。

この作業を通じて、あなたはあらゆるアートを理解し、その中で自分の好みというものが次第に明らかになっていくだろう。そうしたら、次のステップに進む時だ。実際に作品を買うためには、あなたの好きなアートの特徴を具体的な言葉にする必要がある。そのために、書き留めておいたお気に入りの作品について次の項目を調べてみよう。

- ・主題・・・風景画、静物画、人物画、抽象画など
- ・作者名
- ・技法・・・油彩、水彩、版画、木彫、ブロンズなど
- ・制作年代・・・19世紀、20世紀、現代など
- ・制作地・・・アメリカ、ヨーロッパ、日本、南米など
- ・スタイル・・・抽象画、具象画、ポップアート、シュルレアリスムなど
- ・価格

その他にも、サイズやかたち、色など見た目の特徴も記しておこう。

これらの情報を集め組み立てることで、私はこういう作品を探していると人に伝えられるレベルに、その特徴をより具体的に書き出してみよう。たとえば、「19世紀のヨーロッパ印象派の風景画に興味がある」「1940年から1960年代にニューヨークのアーティストによって制作された抽象的な彫刻が好きだ」という具合に。より具体的であればあるほど、選択肢が絞られ、作品を探しやすくなる。もちろん、これらの情報は後から修正可能であるし、一つに絞り込む必要はない。

さて、ここまで自分の好きなアートに対し思う存分夢を馳せてきたわけだが、実際に買うとなったら、現実的にならなければならない。ルノワールやゴッホの作品が果たして30万円で買えるだろうか。紙に描いた下書きであっても無理だろう。しかし、ここで落ち込む必要はない。とにかく重要なのは、あなたの予算内で買える最高のアートを探しだすことだ。たとえば、似たようなスタイルの現代アーティストによる作品やエディション管理された版画作品など、手の届く範囲内に条件を修正していくのだ。

これで、あなたは要望に合った作品をようやく現実的なレベルで探し始めることができる。

ここまでのおさらい

- まずは美術館やギャラリーなど相当量のアート作品を見まくってみよう。時間がない人はタグボートのウェブサイトを眺めるだけでもよい
- 作品については他人の意見を聞かず、自分の心の声に問いかけてみよう
- 作品の全体をじっくり見るよう気をつけよう。そのときになぜその作品が好きなのか書き留めておこう
- より具体的に自分の好きな作品の特徴を絞っていこう。ただし、絞り込みすぎないように。

アートについて語ろう

これまで他人の意見を交えず、自分自身の好みを追求してきたわけだが、いよいよ作品を選び、買うというプロセスに入り、人々とアートについて語り合う時が来た。

この段階から、あなたとアートの関わりは次第に変化していこう。もはや、あなたは傍観者ではなく、一人のプレイヤーなのだから。

最初はアートについて語り合うことに困惑を覚えるかもしれない。なぜなら、あなたが欲しい作品について語ると様々な人々がそれぞれに全く異なる反応を示すからだ。

ある人は、あなたの選択を賞賛し、ある人は批判的な意見を述べるかもしれない。何が正しく何が間違いなのか、誰を信頼すべきで、誰を疑うべきなのか。

アート購入初心者は少々混乱してしまうだろう。なぜなら、あなたには彼らの発言を判断するだけの十分な知識や経験がないからだ。

それでも重要なのは、とにかく飛び込んでみることだ。自分の知識や探している作品についていろんな人に手当たり次第話してみよう。経験を重ねていくうちに、見聞きしたことを自分で判断し、必要な情報を見極め、自分の意見を明確にし、あなたの選択が正しいかどうかを自分自身で決定することができるようになるだろう。

しかし、事前にある程度の知識をもっていなくてはやはり不利な立場に置かれてしまう。相手があなたより有利な立場で会話を進めてしまうことは好ましいことではない。あなたが欲しい作品について尋ねた時、ある人はとても好意的に助言をくれ、ある人は何も答えず、ある人は自分の都合のいいようにあなたを誘導するかもしれない。

重要なのは、誰がよきアドバイザーであるか見極め、彼らから得た知識を良い作品購入に活かしていくことだ。

最初は誰の意見を信頼すべきか判断することは難しいだろう。なぜなら、アートに関わる人々は、信頼に足りうるような態度であなたと接し、説得力のある話し方をするからだ。彼らとの会話を少しでも有利に進めるため、あなたがこれから出会うアートピープルについて事前に紹介しておこう。

アートビジネスに関わる人々

アート購入の課程で最も多く関わるアート専門家は恐らくギャラリー、ディーラー、オークションハウスなどアートビジネスに関わる人々だろう。彼らは作家や作品に関する情報はもちろん、マーケット情報にも精通しているため、購入の際には、最もよきアドバイザーとなってくれるはずだ。しかも、ギャラリーなら店舗を構えているし、オークションハウスなら問い合わせ窓口を設けているので、容易にコンタクトを取ることができる。

しかし、ビジネスとしてアートを扱う彼らは、自分達の扱う作品を買ってもらうことが最終目的であるのは間違いない。アート専門家は必ず専門や限られた対象に興味を持っている。したがって、どんな人でも自分の好きな分野を理解し共感してもらいたいという気持ちが根底にあるといっただけでよい。

アートビジネスに関わる人々は無意識であれ、あなたの選択に介入しようと試みるだろう。そのためか美術商というと高い作品を買わされる、偽物を売りつけられるといったネガティブなイメージを持たれやすいのも事実である。

もちろん、これらはちょっと行き過ぎた表現かもしれないが、商売が絡んでくると人は自ずと警戒してしまうものだ。しかし、必要以上に警戒する必要はない。実際に話しをしてみると、彼らは、あなたの質問に対し真摯に向き合い、作家や作品について生き生きと語ってくれるだろう。自分達が扱う作品に興味をもってもらえることは、誰にとっても嬉しいことだ。そして何より、彼らは自分の扱うアートや作家については誰よりもよく知っている。あなたの探し求めるアート

がそれに当てはまるかどうか明らかになるまで、とことん彼らに質問してみよう。必要な情報はほぼ全て彼らから得ることができるはずだ。

キュレーター（学芸員）や評論家

美術館のキュレーター（学芸員）や評論家といった人々は、商売としてアートを扱うギャラリストやディーラーと異なり、あなたから利益を得ようとは考えていない。その点において、偏見のない公平な意見を得ることができる。あなたの情報収集をよりバランスのよいものにするため、彼らの意見を聞いておくことよいだろう。

コレクター

コレクターはいわばあなたにとっては先輩筋ともいえる人々だ。

身銭をはたいてアートを買う彼らは、時にプロ顔負けの情報通であることも少なくない。

アートを買う上でのノウハウなら彼らはとてもよきアドバイザーとなりうるだろう。

しかし、コレクションの内容に関してはごく限られた分野に絞られている可能性が高い。また、アートを購入すれば分かるかもしれないが、彼らの審美眼で選ばれた作品はいわば彼らの分身のような存在だ。彼らは人々に自身のコレクションを披露し、それがよい買い物であることを認めてもらいたいと願っているものだ。彼らの意見に影響されそのコレクションに追随することは彼らにとって一番の賞賛となるだろう。コレクションの需要が高まれば、その価値を高めることになるからだ。

コレクターは、ディーラーとは異なり、あなたに直接作品を売りつけることはしないが、あなたの選択に対し何らかの影響力を持ちたいと願っている。ただし、四六時中アート業界に身を置いているプロに比べれば、その視野や知識は限られたものと認識しておくべきだろう。

アーティスト

アーティストは、作り手という立場から制作や技法に関する貴重な話をしてくれるだろう。

興味のあるアーティストがいたら必ず彼らと話す機会をもつとよい。作品のコンセプトや制作過程に関わる情報、そして彼らの人間性といったものまで知ることができるからだ。しかし、ディ

ーラーやコレクター同様、彼らは自身の作品を世間に理解し、賞賛してもらいたいと常に望んでいる。たとえ気軽に話しかけたとしても、あなたを彼らのアートのよき理解者にしようと試みるだろう。

プレビューに参加する

ギャラリー、ディーラー、オークションハウス、キュレーター、評論家、コレクター、アーティスト、できる限り様々な立場のアート専門家と会話をするのであなたは偏りのない考えのもと、買うべき作品を決定することができるだろう。

しかし、顧客と直接接するアートビジネスの人々と異なり、キュレーターや評論家、アーティスト、コレクターが表に出てくることはあまりない。

彼らには一体どこで接触することができるのだろうか。

美術館のギャラリートークや講演会に参加する手もあるが、軽い質問ならばともかく、じっくり話をするのは難しい。

そこでおすすめしたいのが、ギャラリーで開催されるプレビューに参加することだ。

プレビューとは展覧会の初日、もしくは前日に開催される内覧会のこと、アーティストや主催者はもちろん、美術関係者が多く集まるイベントだ。通常、美術館で行われる内覧会は、招待客やマスコミ以外は参加することができないが、ギャラリーの場合はその展覧会に興味がある人なら誰でも参加できる。会場では、ドリンク片手に作品の前で人々が自由に語り、さながらカジュアルなパーティーといった雰囲気だ。

ギャラリーのホームページや展覧会のDMに開催日時が記載されているので、興味のある展覧会があればぜひ、足を運んでほしい。最初は、気が引けてしまうかもしれないが、同じアーティストに興味を持っている同志の集まりだ。そのアーティストや展示されている作品をきっかけに思い切って話をしてみると、とても有益な情報を得ることができるだろう。

専門家の話はどう聞くべき？

アートの世界に足を踏み入れたばかりのあなたにとって、専門家の話は驚きと発見の連続だろう。彼らは、意外な作品の見方を提示してくれたり、誰も知らないようなエピソードを語ってくれる。しかし、彼らの話をありがたがって聞いているだけでは、いつまでも一端のアートコレクターになることはできない。やっと専門家と話をするとこまでこぎ着けたら、次は彼らの話をどのよう

に聞くかが重要だ。人々がアートについて語る時、その内容は大別にして次のような項目に分けられる。話をする際に、ただ何となく聞くのではなく、次のことに注意しながら聞いてみよう。

- 事実を確かめる
- 感情的なリアクション

1) 事実を確かめる

「この作家は昨年、あの有名な賞を受賞した。」「この作品は、作家が海外滞在中に制作したものだ。」など、作家や作品について語る時、その情報の多くは事実に基づいて語られる。その話の中で、もし、あなたの知らない情報があれば、必ず確認することを習慣づけよう。作家の履歴や実績に関するものであれば、カタログやインターネットで容易に調べられる。そのようにして、知識を少しずつ蓄積していくことが大切だ。一方、難しいのは、「このアーティストはとても有名である」といったような主観的なのか客観的なのか判断しがたい内容の場合だ。有名といってもある国内やあるコミュニティに限られたものかもしれない。このような裏を取るのが難しい情報に関しては、業界関係者に尋ねるのがよい。ある人は知らないと答えるかもしれないし、名前は聞いたことがあるが有名ではないと教えてくれるかもしれない。ギャラリスト、コレクター、キュレーターなど業界関係者数人に聞けば、その作家の立ち位置は自ずと分かるだろう。

2) 感情的なリアクション、一体どう反応する？

アートが好きであろうとなかろうと、作品を前に誰もが口にする。それは、その作品が好きか嫌いかといった率直な感想だ。このような感情的な発言にいちいち振り回されては、もちろん身が持たないが、これも大事な情報の一つ。取るに足りないと判断する前に以下の点を確認してみよう。

- 発言者が何物であるか
- その発言の根拠は何か

「こんな子供の落書きみたいな絵。私は嫌いだ。」そう発言している人が一般の人であるならば、一つの意見として聞き流しておけばよい。一方、この発言者が美術関係者であれば、なぜそう思うのか理由を聞いてみよう。専門家らしいまともな根拠があるかもしれない。しかし、ここで気

をつけなければならないのは、彼らがどの分野の専門家であるかだ。美術の専門家であるからといって、全ての分野に通じているわけではない。現代美術について語っているのが、古代ローマの専門家であるならば、専門家らしい面白い話は聞けるかもしれないが、必要な情報を得られる可能性は少ない。

しかし、ここで幸運にも現代美術の専門家に出会った場合、彼らは、あなたにとって情報の宝庫であり、彼らから重要な情報を余すことなく、引き出さなければならない。もちろん、彼らの好みに従う必要もないし、意見をそのまま鵜呑みにすることはない。しかし、彼らはただの感情論ではなく、より具体的な理由を挙げるだろう。同時代で技術的にもっと優れた作家がいることや、他の時代のあの作品から影響を受けているなど、事実に基づいた理由だ。そして、知っておくべき作家の名前や見ておくべき作品が展示されている場所、さらに読むべき文献について教えてくれるだろう。これらの情報こそ、あなたにとって、最も重要な情報だ。初めて知る情報があれば必ず事実確認をし、文献に目を通し、実際に作品を見に行こう。

人間を見る目利きであれ

ある作家について知ろうとする時、あなたはその作家について 様々なリアクションを得るだろう。アート関係のメディアでの評価、ネット上での口コミ、また、その作家を知らない人、ただ聞いたことがあるという人、その作家を専門としている人。彼らは、それぞれの立場からその作家についてどんなことを語るだろうか。たとえ、あなたの方が、その作家について詳しくても、彼らがあなたを見下すような態度であったとしても、彼らの話にじっくり耳を傾けよう。その作業を続けるうちに、作家の立ち位置、弱点や強み、今後の可能性、どんな点が好まれ、どんな点が好まれないのかなど、その作家の全体像が分かってくるはずだ。その作家に対するリアクションを少しでも多く集め、その全体像をなるべく完璧に近づけることが重要だ。購入に値すべき作家であるかどうか判断するためだ。

そして、アート専門家は、それぞれの立場から何らかのかたちであなたの選択に影響を与えたいと思っている。誰と話すときでも、その相手が何者であるか。彼らや彼らが話すことは信頼に足りうるかどうか、あなたが出会う人間もじっくり観察すること。アートを買うのだから、ただひたすら美術品と向き合っていれば良いと思っていたかもしれないが、いい作品に出会うためには、アートを見極めるのと同様に人間を見極める目利きでもなければならないのだ。

ここまでのおさらい

- より多くのアート専門家と語り合い、バランスの取れた知識を得よう
 - その際、話し手の立場や信頼できる人物か否かを見極めること
- 専門家と話す時、注意すべきこと
 - 彼らの専門分野を明らかにすること
 - 事実に関して知らない情報は必ず調べること
 - 感情的リアクションは根拠を聞くこと
- どんな意見も無視しないこと。
- 作家に関する情報をより多く収集しその全体像をつかむこと。

アートとお金のはなし

「アートは商品である。」という、意外に感じる人も多いだろう。

なぜなら、アートはアーティストが自分を取り巻く世界や現実の出来事にじっと向き合い、それを形にして表現したいという強い衝動から生み出されるもので、販売を目的に生産される商品とは全く性質が異なるものだからだ。

しかし、作品が完成し一旦アーティストの手を離れてしまえば、他の商品と同様、価格がつけられディーラーやコレクターの間で売り買いされる。実際、世界のアートマーケットでは、およそ年間6兆円の取引が行われ、アートは一大産業として経済活動の一端を担っている。

アートの価値と価格

アートの値段なんてあってないようなものでしょ？アートは作品の価値と価格が分かりづらいため、そのような印象を持たれやすい。たしかにアートは、売買の方法やプロセスにおいては、他の経済活動と共通する部分が多い。しかし、いくつか重要な点において全く異なっている。

たとえば、一般車と高級車の価格の違いは、材料費、製造に携わる人員の数、製造期間など製造に伴うコストを基準に決定され、品質においてもその違いは一目瞭然である。しかし、アートは、サイズやテーマ、制作費、制作にかかった時間が、ほぼ同じ作品であっても、作者が違うというだけで、その価値は大幅に異なる。また、アートは販売するのに一定の質を満たしていなければならないという決まりもなければ、資格が必要なわけでもない。誰もがアーティストと名乗り、

制作したものをアートと称して、自由に販売することができる。実際に売れるかどうかはともかく、どんな値段をつけようと法的には正しいということになる。アートには価格を決定する基準や法律というものが存在しないのだ。

これこそが、アートマーケットのユニークな側面であり、アートを購入する時に考慮しなければならないことでもある。

アートの価格はどう決まる？

ピカソの作品が 215 億円で落札された！

アートに詳しくない人でもそのようなニュースを耳にしたことがあるだろう。たしかに世の中には高値がつくアートとそうでないアートが存在する。アートの価値は一体何で決まるのだろうか。それは、需要と供給のバランスである。

アーティストはどれほど有名か、年代はいつ頃のものが、アーティストは現存か物故か、制作された作品数はどのくらいか、これからも新たな作品が世に出るのか、そのような条件の数々がアートの価値に影響を与える。

たとえば、ピカソは世界的に最も有名な画家であり、マーケットにおける需要が高い。さらに、すでに他界してしまっているため、その作品数は限られている。供給される作品が少なければ、希少価値が生まれ、さらに需要は高まる。結果として、値段はつり上がり史上最高額を記録したわけだ。

アートの価値を上げるには

アートの値段は時間と共に変動するものであり、不変的なものではない。

ある作品は値段が上がり、ある作品は値段が下がったりする。

では、アートの価値を高めるにはどうしたらよいのか。

価値あるアートとは歴史に残るアートである。そのためには、学術的に高い評価を得て、美術史に位置づけられるようなアーティストになる必要がある。美術館のキュレーターや美術学者、権威あるディーラーがそのアートを重要と位置づけ、他のアートより優れていると認めなければならない。たとえば、新進気鋭のアーティストがいたとしよう。ギャラリーでの展覧会でキュレーターの目に留り、まずは美術館でのグループ展に招聘される。徐々に露出の機会が増え、ついには有名な美術館での個展開催が決定する。そのように着実なキャリアを積み重ねたアーティストは過去の作品を含め、今後どんどん価値が高まると考えられる。有名な美術館が一人のアーティ

ストに焦点を当て個展を開催するということは、そのアーティストが学術的に高い評価を得た証であり、多くの美術関係者やコレクターの注目を集めることになる。同時に、アーティストの作品に対する需要も高まるのだ。エキスパートがその価値を認めれば、それは金銭的にも価値があるということになる。その他に権威ある美術賞を受賞したり、国際的なアートの祭典に選出されることなどが、アーティストにとって重要な実績となる。アートを買うならアートワールドで今最も話題となっているアーティストが誰なのか。常にチェックすることも重要だ。

価格操作にご注意を

アートの価格の上昇には、二種類ある。本物と偽物だ。アートの価格とは、本来、需要が高まり自然に上がるものである。一方、偽物とは、学術的な裏付けがないにも関わらず、売り手が一方的に価値ある作品と主張し、価格をつり上げる場合だ。たとえば、オークションでとりわけ実績がないアーティストの作品を価格操作により高額で落札し、その落札価格を実績のように見せかけ、作品を高値で販売する。このような策略的な価格の上昇は遅かれ早かれ本来の価値に見合う価格に下がってしまうと考えられる。正当な評価により価値が上昇したのならば、その後も価値を維持し、上がり続ける可能性が高い。

アートを買う際には、その価格が妥当なものかどうかよくリサーチしてから購入することをおすすめする。

投資としてのアート

アートの価格は流行や経済状況など外的要因によっても激しく変動する。1980年代の日本や、近年、急激な成長を遂げた中国では、その経済の活況に伴いアートの価格が高騰するアートバブルが発生した。このように経済の動きと連動して価格が変動するアートは、しばし株や債券のような投資商品と同様に扱われる。

しかし、金銭目的の投資としてアートは株や債券とは大きく異なるので注意しなければならない。まず、アートは即金性がないということ。株や債券、その他の投資は、売ればすぐにお金に変えることができる。しかし、アートはそうではない。アートを売るには、少なくとも数ヶ月、時には数年を要することもある。すぐに現金を得たいという人にとってはあまりにも長過ぎる。金銭的価値があり資産の一つとして見なされるアートは、むしろ不動産に似ているかもしれない。もし、あなたが家を売ろうと思ったら、ある価格で売りに出し、買い手がつくのを待つしかない。運がよければ、すぐに売れるかもしれないが、なかなか買い手が見つかなければ、売れ残り数ヶ月マ

ケットに留まることとなる。もちろん、需要のある貴重な作品は、すぐに売れ現金化することができるが、そのような作品はごく少数である。多くのギャラリーでも作品が売れるまでに大抵、2ヶ月から8ヶ月はかかるとされ、中には数年を要するケースもある。

セール日が決まっているオークションなら、機械的にすぐ現金化できそうと思われるかもしれないが、これも大きな間違い。オークションに出品しようと決めてから、作品が売れチェックが手元に届くまでには最低6ヶ月はかかる。しかも、万が一作品が売れなかった場合には、またどこか別の売り先を探さなければならない。現代であれば、ネットオークションという選択肢もあるが、いくらで売れるかは予想がつかず、時にギャラリーやオークションで販売するより価格が低くなるリスクがある。

もちろん、その気になれば一週間で現金化することもできるが、その場合、買い手の言い値に従うことになり、かなり安く手放すことを覚悟しなければならない。

さらに、アートを買収する時、決して忘れてはならないのは、手数料の問題だ。株や債券の取引では、手数料が2%を越えることはあまりない。不動産ではたいてい3~6%だ。一方、アートに関しては、よほど高額な作品を除いては、手数料が10%以下であることは滅多にない。オークションで作品を売る場合は15~30%、買う場合には10~15%の手数料を支払わなければならない。ギャラリーを通して売収する場合にも、20~60%は取られると考えてよい。

アートを投資も兼ねて買う際には、これらのリスクも理解し、自由に使える資金のみを当てるべきである。間違っても、いざという時のための貯金や日々の生活費などをアート購入に費やすべきではない。

アートは作品の善し悪しで選ぶべし

アートとお金は切っても切り離せない。だからこそ、アートを買おうとする人なら誰でも、作品自体の魅力とともにその金銭的価値を考慮するだろう。しかし、アートを投資目的のみで買うことはおすすりできない。気に入った作品を買ったコレクターに作品で利益を得たことがあるかと聞けば、ほとんどないと答えるだろう。たしかにいくらかの作品は長い年月をかけて価値が上がり、価格が高騰することもあるが、ほとんどの作品はそうではない。たとえ、価値が下がってしまったとしても、あなたが気に入って買った作品なら、手元で飾って楽しむ限り、その作品は金銭的価値以上にあなたに幸福で豊かな時間をもたらしてくれるだろう。

まとめ

- アートには価格を決定する基準や 法律というものが存在しない
- アートの価格は需要と供給のバランスで決まる
- アートの価値は学術的評価で決まる
- 偽物の価格上昇に注意すること
- 投資としてアートは即金性がない
- アートの売買には高額な手数料が発生する
- アート購入には余剰金を当てること
- アートは、作品の善し悪しを最優先に選ぶこと

アート・コレクションとしての資産形成

アートコレクションは金持ちの道楽ではない。

将来的に世界で活躍し、アートの歴史の名を残す作家を見出す「目利き力」によって、素晴らしいコレクションを充実させることで資産を築きあげていくためにあるのだ。

アートを購入するのは個人的な趣味嗜好である一方で、アートは金融や不動産に次ぐ資産としての価値があることをしっかり認識しなければならない。

つまり、好きな作品を購入する中でその作品が価値を付け始め、何十倍もの資産となり、さらにそれを売却したお金で将来的に伸びる作品を購入、これを繰り返すことで莫大な資産を形成するのだ。

アーティストは作家という個人事業主であり、個人の持つ才能を活かして巨匠へと羽ばたく起業家でもある。

そういう意味で、アーティスト=起業家というふうに考えると、作品そのものも重要であるが、アーティスト個人の素質に目を向け、その成長を支えていくことが、最終的にリターンを得るといふ、コレクター=投資家と似た側面もあることをじっくり理解してほしい。

今、日本のアート市場が他国と比較してあまりにも小さいのは、コレクターが投資家に近い意味を持ち、アートを楽しみながら資産形成につなげていくことができるという認識が深く浸透していないことにも原因があるようだ。

資産としてのアートコレクションとは

アートは作品がオークションハウスでのカタログに乗った段階で、資産としての価値が外部に公開されることになる。

ある意味で起業家の持つ株式が上場して公開されたマーケットに乗るようなものである。

スタートアップ企業への資本参入は、一般的には起業家と投資家との友好的協力関係から始まる。それと同じように、まだ若く才能のあるアーティストをサポートしてくれるパトロンのなコレクターも、将来的に作家が成長できるように作品購入をしてくれる投資家だ。

短期的なリターンを望まず、将来価値がなくなる可能性も勘案しながら、より大きなリターンを期待して作品を買うコレクターは、やはりスタートアップの投資家と心理的に非常に近いイメージだろう。

アーティストの才能に賭けてみたいと思うコレクターは作品のもつ素晴らしさに惚れるだけではなくて、作家の人間性にも賭けているのだ。

日本は、このアートのもつ資本主義的な「投資家と起業家との関係性」の理解が透していないため、投資として作品を購入するという意識が低い。

一方、欧米や台頭するアジア各国が現代アート市場を広げている理由に、資本主義としてのアートの関係性については幅広く知らされている。

まずは気に入ったアーティストを作品購入という形でサポートし、そのアーティストの作品がオークションのカタログに掲載されるほどになった時点で売却し、そこで得た売却益でさらに若いこれからのアーティストの作品を買うというのが最もよい循環である。

多くの有名なコレクターはこのようにして、よい循環を自分で作ってきている。

アートを選ぶ選球眼と売買のタイミングをうまく活用することで、少なくない資産形成を築き上げることは夢ではないのである。